

<出会い！！>

シンガポールを向した船はマラッカ海峡を通りインド洋に入り、明日はコーチンに入港する。スリランカ沖を通過するときには12月にこの周辺を襲った地震の犠牲者の冥福を祈り黙祷した。この海域は海が荒れることが多いと聞くが今のところ波も穏やかだ。この一週間は船酔い止め薬も忘れていた。船酔いといえば、初日の横浜から神戸までは海が大荒れで大半の乗船客が船酔いに苦しみ、その中の一人は105日間の旅に耐えられないと神戸で下船したという。船内のエレベーターも運転を中止するほどだったからかなりの揺れだった。24時間効くという酔い止め薬を早めに飲んで寝てしまった私はラッキーだったといえる。

上海を過ぎたころから風邪を引いた人がかなり出てきて、マスクをしている人も見かけるし、診療所の前には診察を待つ人の列が出来ている。手洗いとうがいと十分な睡眠をと船内新聞にドクターが書いていた。それにしても古い船だからか、船内は場所によって温度の差が大きく、各キャビンごとに温度調節は出来ないからいつも上着を持って歩き、脱いだり着たりしている。寒暖の差も風邪の原因のひとつかもしれない。

インドの次の寄港地、ケニアがマラリアの汚染地域に指定されたので予防薬を飲むように勧められた。通常は週一回ケニア入国2週間前から、出国後4週間飲むのだそうだ。私の場合、心臓の薬を服用しているので、ドクター面接で入国2日前から32週間毎日飲む別の薬を処方された。また、インド入港に際して全員4日分の体温を記録し、検疫所に報告することになったからと、4日前からピースボートセンターに向き、検温し、体温測定シートに記入して提出している。海から入国するときには空港とは違うことがいろいろあるみたいだ。

この船旅に私は一人で参加しているが、毎日実にさまざまな人との出会いがある。廊下を歩いていた、デッキを散歩していてすれ違う人は誰とでも挨拶をする。朝、昼、晩の3回の食事(午後のティータイムを入れると4回)は、毎回、ほとんど新しい人の隣に座ることになる。どこから乗船したか?きょう

はどのイベントに参加するか(したか)?日の出を見たか?イルカを見たよ。南十字星が左舷に見えるよ、等等話が弾む。そして、次の講座と一緒に参加したり、その参加した講座で又知り合いが出来る。デッキに出て夕日を眺めたり、夜、居酒屋“波へい”でビールを飲んだりする仲間も出来た。

毎日、さまざまな企画が開催されているが、大きく分けて3種類ある。ひとつはピースボート企画で有料の地球大学講座、有料無料の英語講座、スペイン語講座、水先案内人の講座など、2番目はジャパングレイス(旅行会社)企画の寄港地説明会、オプションツアー説明会など、3番目は(これが一番多いのだが)個々の乗船客の自主企画。特技を持つ人が何を企画してもよいので場所の調整が大変なようだ。ラジオ体操、太極拳、絵手紙、コーラスは私が参加しているものだが、他にも、ヨガ、フラダンス、ソシアルダンス、手芸、折り紙、尺八、謡曲、シャンソン、八丈太鼓、ひきしめ体操、チア・リーディング、バスケットボール、卓球、手品、麻雀、語学(英語、スペイン語、ハンガール語、インドネシア語、スワヒリ語)等等。

この他にも新しい自主企画が次々と生まれている。私は午前中は主に自主企画に、午後はピースボートは水先案内人企画に参加している。さまざまな企画を作る側(手伝いを含めて)に参加すればさらに出会いの場は広がるだろうが、今のところ私にはそこまでの元気はない。先日シンガポールで下船した水先案内人の本田さん(91歳)が「ちょっとキザですが、フランスの詩人が“人生とは出会いから別れまでの時間を糸で繋いで首飾りにしたものだ”と言っています」という言葉を残していった。なるほどなあと思えてきた。(2005年2月20日)

<コーチンからモンバサまで>

コーチンを出た船はインド洋は西南西へケニアに向けて進んでいる。昨日午前4時ごろ赤道を通過したときには汽笛の合図があったということだが、熟睡していて知らなかった。

コーチンでは、オプションツアーに入らず自由行動をとった。ピースボートの停泊港はエルナクラム地区のある新市街とフォートコーチンや、マッタ

ンチェリー地区のある旧市街の間にはさまれたウィリングドン島という人口の島にある。島とふたつの市街は橋がかけられているがタクシーやオートリキシャでこの橋を渡るよりもボートを利用するのが経済的だ。2年前、ここを訪れたときは人と任せだったが今回は自分の足で2日間歩き回った。ジェットと呼ばれるフェリーやボートの船着場がいくつもある。1回の料金が2ルピー(約50円)くらいなので、何回もボートを乗り継ぎ、前回行かなかったユダヤ人教会やヴァイピン島にも足を伸ばした。文字が読めないからどこに連れて行かれるか不安もあったがちょっぴりスリリングで楽しかった。

コーチンを出港した翌々日に洋上運動会があった。その何日か前から若者たちが中心になった実行委員会が出来た。ひとりひとりの和みの「和」が「輪」を作ったとき、運動会は必ず「沸」きあがるはずと「つながる家族の和・輪・沸」というスローガンで、誕生月によって4つに分けたチームが作られた。優勝チームには居酒屋「波へい」で「1時間、飲み放題」の豪華プレゼントもあるというものだった。各チームの参加人数が得点に大きく影響するというので、私も白組のひとりとして人数を数える開会式と応援合戦の時には参加したが、残念ながら優勝はできなかった。日焼け対策をして水分補給をしても炎天下では1時間もしないうちにフラフラになりキャビンに戻って休んでしまった。

船会社側の企画したブリッジツアー(操舵室見学会)に参加した。操舵室は普段歩いている8階デッキからcrew onlyと書かれた階段を上ったところにある。いつも下から見上げていた救命ボートが眼の高さにある。室内は他では見ることでできない計器の数々。舵輪2コは50年前建造当時のままのものだそう。船にもブラックボックスというのがあるのをはじめて知った。室内にはエアコンがないため非常に暑い。ここは常時2名のペアで4時間交代で6名が仕事をしているそう。30分余りの楽しい見学会だった。

シンガポールから高遠菜穂子さんとフリージャーナリストの綿井健陽さんが乗船した。イラク問題やNHKの番組改変問題についての講座が何回かあった。こんな機会でないと見たり聞いたりできない映

像や話だった。あの“ETV2001”も見ることができた。今ではあのビデオは封印されてしまってNHKライブラリーに行っても見るできないそう。

この船には10数ヶ国の人達が乗っている。その人達も当然いろいろな講座に参加している。ピースボートにはCC(コミュニケーションコーディネーター)というボランティアがいる。CCとは外国語と日本語の掛け橋となる通訳者のことで水先案内人企画やオプションツアーの際に英語、日本語、スペイン語のコミュニケーションがスムーズに行くよう調整してくれる人たちだ。

今回、この船には14人のCCが乗っている。CCは通常2人~3人でチームをつくり、事前の打ち合わせを何時間かやって講座に臨むそう。専門用語などはその際にきちんと調べておくが、質疑応答の時間になると予想もしない言葉が出てくるので戸惑うことがあるという。10分交代で“通訳”しているが自分が担当する10分間はもちろん、その講座が終わるまでは緊張の連続だと、以前CCをやったことのある若い女性が話していた。PA(パブリックアドレス)というボランティアもいる。音響や照明を担当している人たちで、運動会で掛ける音楽を、ボタンを押しワッと盛り上がる瞬間を想像しながら、朝までかかって探したなんて話も聞いた。

いろんな人たちの力で105日間のこの旅が続けられるのだということが実感できる。

明日の朝、ケニアのモンバサに入港する。日本との時差は6時間。きょうから飲み始めたマラリア予防薬の副作用なのか体調が悪い。この薬を32日間飲み続けるとなるとちょっと不安になってくる。(2005年2月26日)